

迷うのが人生ですよ

・進路はきまった？

だいぶ以前、三年生とこんな会話がありました。

「どうですか、将来進みたい方向、だいたい決まった？」

「それが、迷っているのです」

「ほう、どんなことで迷っているの？」

「どんなことって、・・・、高校、そんなに行きたいとも思わない。

親は行け行けと言うんだけど、そう言われると、何か行きたくなくなっちゃう」

「なるほど、進路を決めるのは自分だと思うわけね」

「でも、先生も、そう言っているでしょう」

「そうですよ、どんな人でも自分の進む道は自分で選ぶのが自然だものね」

「でも、どうやって選んでいいか、わからない」

「そうね、知らない土地に行くと、どこを見学していいかわからないからね」

「そんなとき、観光案内のガイドブックがあるでしょう」

「高校案内のことだね」

「そう、あれ、何回見ても、みんなカッコいいこと書いてあって、みんなイイ学校だと書いてあるから」

「そうだね、どの高校も、いい高校だと言えるからね」

「そうですか、どんな高校もイイのですか」

「その高校の特徴というか、特質というか、そういうものがあってね。それに自分の個性が合っていれば、そこがイイ高校という感じがするでしょう」

・先生はどうでした

「先生は、イイ高校でしたか」

「いや、私が通った高校は、私にとってイイところもあったし、よくないところもあったね」

「どういうことですか」

「やはりイイやつがいてね、影響うけたことね。何人かの先生にも感化されて、その後の方向をきめるのに影響されたことかな。それから高校時代の読書が、私の場合は大きかったな」

「読書なんかは、どこの高校へ行っても、変わらないのではないですか」

「そうね、私たちの場合は、本がなかった時代だから、一冊の本を回

し読みしたものですよ。下村湖人の『次郎物語』なんかは、みんな、引っぱりだこだったな」

「あ、映画でもやりましたね。ぼく、見てないけれど・・・」

「あ、そう。あの中にある『白鳥会』といったかな、そんな会を自分たちもつくってね。盛んに人生論をたたかわしたものだ」

「へ、今、ぼくたち、そんなことしゃべったことないですね」

「当時は、話題がなかったんですよ。新聞雑誌も少なかったからね」

「ところで、自分にとってイイ学校とは、何ですか。先生は高校をどうして選んだのですか」

「私の場合は通学距離が近いということ、親や先生が推薦したということ、こんなことですね」

「案外、いいかげんですね」

「そうね。親たちは、どこへ行っても本人次第と思っていたものだから、そんなに世間には関心なかったようです」

・自分に合った生き方を見つけよう

「ぼくの家では、違うんです。評判のいい学校は、それなりに高い評価を得ているから評判がいいのだと言い、いい環境に入ればイイ影響を受け、イイ友達もできる。その反対は困ると、これ一本槍で、とにかく『いい高校』へ入れ、できるだけ偏差値の高い高校に入ると、これだけです」

「そういう考え方もありますね。でも無理して入って息切れて、途中でリタイヤということもあるからね」

「無理しないということは、無理して勉強しないで遊んでいると？」

「そういうことではないと思うね。自分の力以上のことを望むことが無理しているとなるのです。私は自分を素直に出していけることがいいと思っていますね」

「というと、どういうことですか」

「特別、気張ったり、力んだりしなくてもいい生き方ができるということです。つっぱったり、逃げたりしないでもいい状態ですよ。ありのままの自分でいられることですね」

「それには、自分の性質とか興味や関心を知ることが大切だということですか」

「自分を知るために、勉強するということもあるわけね。自分の考え方の癖とか、感じ方、思いかたの傾向というかな。そんなものを知るための基礎なのですね。学校の勉強は」

「むずかしいものですね」

「そんなにむずかしいものではないですよ。どんな大人でもみんな学校へ行ったし、それなりに勉強してきたものですからね。みんな、迷って迷ってここまで来たのが大人なんですよ。私など今でも迷っていますよ。迷うのが人生なのかもしれませんね。迷って人間的な成長をするっていうのかな。そんなものですよ」

続ける

やがて年の暮れ。あれもこれもと、さまざまな決意を胸に新しい年を迎えたのが、ついこの間のことのような気がするのには、早いものです。年の始めに心に定めたことの中で、これまでずっと続けてきていることもいくつかるけど、ことしも辛抱が足りず、途中でやめてしまったことも少なくない。どれもこれも、ことしこそ、強く自分に言いきかせたはずなのに、なぜだめなのだろうか。続けることができたことと、できなかったことを比べてみて、気づくことがあります。それは、続けることの効用や楽しさは、初めのうちはわからないということです。三月、半年と日を重ねるうちに、だんだんわかってきて、そうすると途中でやめてしまうのが、もったいなくなります。それまで続けることができるかどうか。無理をせず、たとえ少しづつでも、寸暇をさいてともかく続けること。それを来るべき年も続けたい。

詩

望遠鏡で のぞいてごらん

工藤直子

望遠鏡で のぞいてごらん

真っ白な来年

山のむこうの空

さて なにを描こうか

空のむこうの星

星のむこうの明日・・・

1年のしめくくりと、次の年への備えをいっぺんにしなくちゃいけないあわただしくも楽しい12月。

冷たい北風に吹かれながら、いろんなことを考えます。にぎったこぶしの手のひらの温かさにふと気づくのもこんなとき。

そんな温かさは、自分だけでなく、他の人にも伝えたいもの。だから、近づくクリスマスやお正月に、相手の喜ぶ顔を思い浮かべながら「何をプレゼントしようかな？」と考えます。やっぱり、人の笑顔って楽しみですものね。

さあ、もうすぐやってくる新しい年。そこに描かれるのは、自分だ

さあ、もうすぐやってくる新しい年。そこに描かれるのは、自分だけの記録。夢をふくらませるのは今。

「真っ白な来年に 何を描こうか」

大きな夢でも、小さい夢でも、どれもこれも自分一人の夢。

あなたはどんな夢を描きますか？

中学校駅伝競走関東大会 第9位

12月7日（日）海の公園・八景島で行われた関東大会に参加した本校女子陸上部は惜しくも入賞を逃しましたが、参加25校中、第9位になりました。

応援ありがとうございました

YNB杯野球大会 優勝

12月6日（土）本校グラウンドで、決勝が行われ、港北区の高田中と対戦し、3-2で快勝し優勝しました。おめでとう。

